



「非才是レ故我國力ノ懸絶セル一大源因ナ・蒸氣ナ

使用スルニ鉄道長カラズ漁船多カフス製造與フア電

氣ナ利相スルニ電信普カフス電燈設ケズ水雷足ラズ

是レ皆文化發達國擴張ニ於テ大ニ要フ可ヤモノ

ナリ五日東北レタ喫シ故レナ美ニ須臾モ忘レ、能

ム文通々消息通シノ跡ナ鑒ミテ此感ヲ書ス

十 月 二十一日 沖縄縣大連記官兼別事森長義君は去月四

日左の御内務少佐は

○沖縄縣大連記官兼別事森長義君は去月四

日左の御内務少佐は

○増俸 工部省准委任御用掛白木久風君は去る十五

日自今月俸金八十圓下賜せらるゝ旨達せられたり

○家督相續 東京府華族一條孝丸君は一昨二十日家

督相續仰付られたり

○島本仲道君 北洲社々老ある同君には來る廿五日

當地を發え舊里高知に歸省するよ

○御車寄 赤坂坂屋居の御車寄は今度修繕を加へら

るゝに付昨日より同所の通行と差止め右工事中は

宮内省舊御車寄より出入する事ふ相成りたり

○門鑑検査 芝離宮の諸御門へ是處宮内省仕人にて

通行諸人の御門鑑を検査し來りし處昨廿一日より同

省門部を以て同鑑札と検査する事に改められたりと

○収稅委員 大藏省租税局に於ては本年各種の収稅

委員と迄て昨日屬官十餘名各府縣へ出張を命ぜられ

たり

○佛軍敗北の電報 昨日の紙上より佛人は安南の決戦

ふ於て勝利を得たる由横濱メイルより譯載したるが

尙昨日發行の同新聞を見るふ昨日午後に達したる電

報は前日と丸で其趣を異にし佛人は黒旗兵と戰て敗

北しり安南駐在の佛國文武官中何か講論の合はさ

るといひと見へ水師提督クルベ氏ハ余は當職と守

るふ堪へずと既に其軍務總督と辭し歸國の途上

りたりとある由を掲載したり事甚だ疑ふべしと雖も

尙此ふ譯載し置て起日詳報を得る迄の参考を供す

○磐城艦 磐城艦は一昨十九日午前八時朝鮮國仁川

へ向け長崎港を拔錨せし旨電報ありる由

○竹崎出張 警視廳第一局請近藤迂君(前職に近藤

鶴君とせしは誤)か同局吏員三名巡査三十名と共に

主急朝鮮國へ出張を命ぜられたる由は前號の紙上より

記載せし夕方其御用向きと聞くよ朝鮮國所領の竹島

ハ樹不繁茂せる一の無人島あるを以て過般來長門筑

前邊の本邦八凡ろ七百名桂該島に渡り切り材不を

伐取り船より積るよとの轉入の耳入り此程其旨我

政府へ通報ありてよりこい拾置き難き事なりとて

俄かふ斯くは出張を命ぜられ右の者共を探索捕縛せ

玄むる爲ありと尙ほ右の外務省屬官一名も一同共同運輸會

社製造を協して本日該編へ向け出發をる旨ありと

と事ら製造中ありと

○砲臺演習 海軍水兵發火演習は久しく見合ありし

如來は時々之を施行するととなり既に昨日は晝

初阿片を用ひ給はす恭親王も先頃御不列の時に方り

中よくて又一人の吸烟する者あしと皇太后宮は一

日阿片を用ひ給はす恭親王も先頃御不列の時に方り

英京龍騰のサヤシング、クロスよりボーラー、モール及

亦美ふ

六月より

六月より

六月より

六月より

六月より

六月より

六月より

六月より

六月より

○海軍樂隊 艦隊司令燃扶桑號へは愈來の廿五日

海軍樂隊一組を乗込することに定めせりと聞く

云へり又恭親王は近頃御館と園庭との間に雑誌機

と仕掛けられたりと云ふ○先頃日本へも漫遊して最

も懇切なる禮遇を受たりと云ふシヨボア侯にハ先

も於て印度邊の一箇長來朝せり杯と晝立たるにハ同侯

試験お及第せしは(甲種一等運轉手)東京府平民岡村

鐵三郎氏あり

○清國通信(前號の續き)北京よりの來信に清帝近

は野營を敷てバランに進みたりとの電報を掲げり

乃ち二三の地圖を由りて右ボーン、バラン両地を

れば左に記す今上光緒皇帝の性質極て銳敏ふして夙

に學問と好ませ給ひ特に進歩の著に至ては通常兒

童の遠く及ぶ所ふ非らず毎朝午前八九時頃より御學

問所へ出御あり數名の教師を就て午後一時頃迄御勉

學遊ばるゝと一日を去て怠り玉ふ事なし夙興四歲

日の御行狀をとて西字新聞に掲げたるものを得さ

れば左に記す今上光緒皇帝の性質極て銳敏ふして夙

に學問と好ませ給ひ特に進歩の著に至ては通常兒

童の遠く及ぶ所ふ非らず毎朝午前八九時頃より御學

問所へ出御せらるゝ前には必ず大臣に謁見と賜て

の時御位に登り本年甫て十三歳より涉らせ玉ふ毎朝御

の時御位に登り本年甫て十三歳より涉らせ玉ふ毎朝御